

XenosagaI・II - 第十九話 解放 - Befreien - 上

ペレグリー: ーE. S. イサカルを与えられながら、不覚をとった。無念だー

マーグリス: ジン・ウヅキがいたことは、俺にとっても予想外であった。貴様も会ったのであろう？

ペレグリー: ー以前と、実力も決意も変わらぬようだった。

マーグリス: 奴との決着は、俺がつける。貴様は見逃さずにいればよい。
それよりも、いまは Ω だ。予定通り、老人の手で目覚めたのだな。

ペレグリー: ええ、間違いなく。これでよかったの、マーグリス？

マーグリス: すべては総帥のお考え通りだ。我らはこの隙に、オルムスを掌握する。

ペレグリー: ! ついに始まるのね。

マーグリス: 結局、艦隊戦はザルヴァートルの物量に押し切られた。
間もなく、奴らは Ω システムへ攻撃を開始するだろう。

ペレグリー: その隙に乗じるとのこと？

マーグリス: そのために、わざわざ玩具を与えてやったのだ。
貴様は子飼いの審問官とともに、所定の手順に基づいて行動せよ。

ペレグリー: (星団連邦軍から離脱し、いままたオルムスにも背信する。司令、あなたはどこへ行くー？
ジン、あなたから見れば、ますます我々は、唾棄すべき存在となったのだろうかー)

解 - Befreien - 放

教皇セルギウス: ふむー我々の艦隊が駆逐されたというのか。

マーグリス『ザルヴァートルとやらの執念、たいしたものですね。』

教皇セルギウス: ユーリエフの亡霊めーそうまでして我らを排除したいのかー

ふんーまあよいわ。その行為がいかに愚かしいか、思い知らせてくれる。

マーグリズ、E.S.を繰り出して奴らを誅殺せよ。

マーグリズ『ふーーーーー』

教皇セルギウス：どうした、マーグリズ。私の言葉が聞こえぬのか。

マーグリズ『貌下御自らの御手をくだされるがよろしいかとー』

教皇セルギウス：ー正気か、マーグリズ。

マーグリズ『いたって正気であります、貌下。われら審問官が仕えるは、ただ一人。

ーそれはあなたもご存じのはず。』

教皇セルギウス：ほう、ようやくハインラインが正体を現す気になったか。しかし、解せぬな。

私がΩシステムを得たいま、貴様らの思い上がった望みがかなうと思ってか。

マーグリズ『すべては総帥の思惑通り。後は貌下に、殉教者となっていたただくのみ。』

教皇セルギウス：小賢しいことを言いおるわ、若造どもが。

マーグリズ『若造ーですか。私はともかく、総帥には異存がありそうですな。

いずれにせよ、同志としてのご縁はこれまでです、貌下。』

教皇セルギウス：残念だよ、マーグリズ。我が行く道、かつての同志の血で塗り固めていくことになろうとはな。

マーグリズ『私も違う意味で残念ですな。では、貌下。これにてー』

教皇セルギウス：背徳者めー己がなにを敵としたか、思い知るがよい。

Ωシステムよ、その真の力を我が前に示せー

ー

オペレーター：艦長、前方の巨大物体から高エネルギー反応！

あと30秒で本艦隊に到着します。

艦長：シールド展開！迎撃準備を開始せよ。

オペレーター：ダメです、このエネルギー量は本艦のシールドではーーーー！

艦長：くっー退避せよ！

オペレーター：間に合いません、到着まで5秒！

艦長：うおおおおおっ！

ー

教皇セルギウス：うわっはははははは！

ー

アルベド： くっくくくーやってくれるぜ。

本気で向かってくるでもなく足止めを繰り返すと思ったが、そういうことか。

緋い外套の男： —————

アルベド： あの狂信者どもにゾハルを渡して、なんになる？ 奴らには過ぎたオモチャだぜ。

緋い外套の男： —取引をしよう。

アルベド： ああん？

緋い外套の男： 君の願い、渴望、我々なら、かなえられるー

アルベド： —————

—

ヘルマン： Ω システムが——甦った——？

リヒャルト： 惑星を破壊し——艦隊を一撃で——あれが Ω システム——

黒い外套の男： —————

ヘルマン： もはやこれ以上、この場にとどめられておくわけにはいかん——！

はああっ！

手応えが——ない？

逃げられた——のか？

リヒャルト： ヘルマン、もういい。ペレグリー師から通信が入っている——

ペレグリー『アルベド・ピアソラの捕捉、失敗したようだな。』

リヒャルト： ええ、遺憾ながらその通りです。

ヘルマン： 弁明の言葉ありません、ペレグリー師。

ペレグリー『——状況が変わった。これより、お前たちは肅正に参加せよ。』

リヒャルト： ！

では、ついに——

ペレグリー『異端審問官すべてが待ち望んだ刻が来たのだ。ただちに帰還せよ。』

エルザ 

Jr.：まったく、いいタイミングで来てくれたもんだぜ。

ハマー：いや、そりゃもう、苦労なんて言葉で片付けられる苦労じゃなかったっす。

あのだでかい要塞が消えた時に時空震が起こって呑み込まれそうになるわ、
艦隊に追い回されるわ、トニーの馬鹿がキレそうになるわ、船長の借金の督促状は来るわ、
詳しくはサブストーリー参照って感じっす！

⇒ [サブストーリー 11：ハマー篇](#)

トニー：ったく、このタコ。調子に乗ってんじゃないよ。状況見えてんのか。

マッシュズ：おう、そうだ。ちび旦那、あのバケモンはいったいなんなんですか。

さっきは一個艦隊があいつに吹き飛ばされてましたぜ。

Jr.：亡霊の親玉さ。

俺たちはゾハルの確保を依頼されてたけど、間に合わなかったってことだ。

アレン：じゃ、じゃあ、まさかあの中にゾハルが！？

ジン：そういうことです。十四年前、プロト Ω はエミュレーターでさえ、恐るべき力を発揮しました。

その完成体である Ω システムがオリジナルゾハルを得たいま、どれほどの存在になりえたのか――
想像すらつきかねます。

Jr.：――――

ケイオス：――――

モモ：――――

ジギー：――――

マッシュズ：で、この先、どうします？

カナン：任務は失敗に終わった。

――そう報告しに戻っても、どこからも避難される筋合いではないだろうな。

Jr.：へ、どこからどころか、この船の中にたくさんいるんじゃないのか？

あいつを放っという気が済むわけないって連中はさ――――

ケイオス：――――間違い。Jr. の言う通りだね。

ハマー：ん？

――――ちび旦那、汎用帯にちび旦那宛に音声通信が入ってるっすよ。

Jr.：なんだぁ？

ハマー：暗号フォーマットで圧縮されてるっすけど、展開しますか？

Jr.： ああ、開いてくれ。

ユーリエフ『久しぶりだな、愛しい息子よ。』

Jr.： ———！！

そ、その声は——

モモ：（Jr.さんの、お父さん——？）

カナン：ディミトリ・ユーリエフ博士か？ だが、博士は十四年前に——

ユーリエフ『十四年前の出来事は聞いた。アルベドがウ・ドゥと接触し、事象変移を引き起こしたそうだな。

———ウ・ドゥの消去は失敗に終わったか。非情に遺憾だよ。』

Jr.： てめえ——対消滅を起こせば、ミルチアひとつくらい吹っ飛ぶ可能性、知ってやがったろう！

ユーリエフ『——やれやれ、私はおまえたちU.R.T.V.を愚鈍に育てた覚えはないぞ。

惑星ひとつで星団を救えるなら、安い代償であろうに。』

Jr.： 許容範囲内の被害ってか——嫌な言葉だぜ。

ユーリエフ『現在、我々はふたたび、ウ・ドゥ覚醒の危機に瀕していると私は認識している。

この状況下にあって、オルムスは恐るべき力を甦らせた。

あれの存在はゾハルの波動を活性化させ、ウ・ドゥの目覚めを促進するであろう。』

Jr.： Ω システムか———

ユーリエフ『U.R.T.V.の創造主として、私はふたたびお前に命じよう。

速やかにΩ システムを破壊するのだ、ルベド。』

Jr.： その名前で呼ぶんじゃねえ。俺はガイナン・クーカイ・Jr.だ。

ユーリエフ『——どうだ、指令の内容に異存はあるかね。』

Jr.： 言われなくても、あいつは破壊する。

だが、あんたの指令だからでも、まして、俺がU.R.T.V.だからでもない。

ゾハルに関わっちゃった者のひとりとして、見逃せないからだ。

ユーリエフ『——好きにするがいい、結果が同じであればよい。楽しみにしているよ———

———ルベド。』

Jr.： くそったれ！

ジン： ————

アレン：（ジンさん———）

クーカイ・ファウンダーション 

ガイナン： く、ううううう――

Jr.――

俺を――

信じるな――――

エルザ 

Jr.： ハマー、さっきの通信――発信源はどこだ？

ハマー： いやあ、なんかルートを複雑に擬装してますねぇ。

Jr.： 追跡は無理か？

ハマー： 無理とは言いたくないっすね。でも、時間はかかりますよ、確実に。

Jr.： かまわねえ、やってくれ。上手くいったら、ボーナスを出す。

ハマー： ほんとっすか！

マシューズ： よっし、ハマー、ナビはこっちにまかせて、お前はそっちに集中しろ！

ハマー： ちょっと船長、これは俺の個人的な収入っすよ。船の売り上げとは無関係――

マシューズ： るせえっ！ てめえもちったあ、愛船精神をだなあ――

Jr.： （クソ親父め――あんたの思惑とおりにすべてが進むと思ったら大間違いだぜ！）

ジギー： よし、そうと決まれば、すぐに乗り込むべきだろう。

ケイオス： そうですね――Ω システムを破壊するのは難しいけど、
一点突破で中枢のプロト Ω を叩くことなら、不可能じゃないと思う。

あそこにはいま、オリジナルゾハルがある。

時間が経てば、どんな事象変移が発生するか、わからない――――

Jr.： よっしゃ！

――――ところで、シオンとその兄貴はいったい、どこにいるんだ？

モモ： ジンさんはさっき、ブリッジから出ていきました。

アレ： —————
（主任は————）

—

シオン： ————
ジン： ここにいたのですか——
シオン： ————
一人にして。

ジン： みなさん、すでになすべきことを定めたようですよ。
あなたはずっと、そこでそうしているつもりですか？

シオン： ほっといてって言うてるでしょう！

ジン： ————

シオン： あれじゃ、十四年前となにも変わらない——あの時もそうだった——
フェブは——彼女は、私の目の前で殺された。
私は一人で———たった一人でなにもできずに逃げ出したの。
今度だって、なにもできなかった——
セシリーとキャスを撃たせたのに、ゾハルを奪われて——
あんな怖ろしいものが甦ってしまった。ミルチアまで————

ジン： シオン————

シオン： ねえ、なんで私じゃなきゃダメだったの——？
私、なんにもできない。いつだって、私のすることは手遅れ————
私なんか———なにも、できやしない————
みんな、私なんかに期待しないでよ————！

ジン： シオン——
あなたには、フェブロニアの意志が伝わらなかったのですか？

シオン： ————
フェブの——意志？

ジン： おそらく彼女はね、自分の妹たちと同じくらい愛していたんですよ。

シオン： フェブが、誰を——

ジン： 過去という鎖に縛られた、もう一人の妹。

彼女はね、二人の妹と同じようにそのもう一人の妹も助けたいと思ったんじゃないでしょうか。

シオン：もう一人の妹？

ジン：わからないんですか？

だから、彼女はあえてあなたにつらい役目を与えたんですよ。

シオン：フェブがー私をー

ジン：シオンーあなたがこのつらい世界から孤立するのも、受け入れるのも、それはあなた次第です。

でも、これだけは言える。あなたがどんな選択をしようと、決して、一人ではない。

それともまだ、フェブロニアの気持ちが理解できないのですか？

シオン：――――

ジン：さあ、行きなさい。あなたはまだ、みな期待を裏切るべきではない。

シオン：――――

兄さん、あのね――

ううん――先に行ってる。

ジン：ほんとーダメな兄貴ですね。

フェブロニアーあなたを妬ましく思います。

実の兄である私がやらなければならないことを

あなたはシオンに、してあげられたのだから。

私はシオンになにをしてあげられるのか――

いや、私自身、同じ鎖を断ち切ることができるのでしょうか――

シオン：兄さん――――

ジン：シオン、人は万能ではありません。

やるべきことが手遅れになってしまうことも、幾度だってあるでしょう。

でもね、人は命ある限り、何度だってやり直すことができるんです。

一度、手遅れだったのなら、次の機会には、もう一步はやく、踏み出せばいい。

そうやって生きていくしかないんです、私たちは――――

シオン： うん、ありがとう、兄さん――――

ジン： さあ、はやくお行きなさい。仲間たちが待っています。私もすぐに行きますよ。

――

ジギー： シオン――――お兄さんとは、ゆっくり話せたのか？

シオン： え、ええ――何年ぶりかっていうくらい、いろいろ――――

ジギー： ――――そうか。

シオン： あの――――

ジギー： ―――――

シオン： もし、聞いてよかったら――

ジギー： かまわんさ、俺の家族のことだろう？

シオン： え、ええ――――

ジギー： ――――もう百年以上、昔のことだ。

俺は、アブラクサスという惑星で、連邦警察に勤務していた。

シオン： アブラクサスって――

ジギー： そうだ、ヨアキム・ミズラヒとは同郷ということになる。

いまはミクタムと呼ばれている、あの惑星だ。

現代[いま]も変わりはないが、当時もテロリストが我が物顔で横行していた。

シャロンは連警付属病院に勤める医師だった。俺の部下を看とってくれたのだ。

シオン： シャロンさん、その方が――――

ジギー： ああ、俺の家族になってくれた。彼女と、彼女の息子ホアキンの存在だけが――
無彩色だった俺の世界に、彩を与えてくれる。―――そんな気がした。

シオン： あの――――

（おふたりはいま――なんて、聞けるわけがないわよね

だって、それはジギーさんが生身だった頃――百年以上も昔の思い出

だとしたら、おふたりももう――）

ジギー： つまらない話だったな。

シオン： いえ、聞かせてもらえて――嬉しかったです。

ジギー： そうか――――

—

モモ： あ、シオンさん————

シオン： モモちゃん、よかったーあの、話したいことがあったの。

モモ： それ、しなくても大丈夫かもーそんな気がします。

シオン： え？

モモ： あの濃藍色のE.S.が現れた時のこと、ですよ。

シオン： ええ、私————

モモ： モモ、ちょっと驚いちゃいました。でも————

あるとき、言葉じゃないけど、シオンさんの気持ちーいっぱい聞けたから。

モモ、わかってるーと思います。

シオン： —ありがとう、モモちゃん。じゃあ、あらためて、力を貸して。

私、赦せないの。セシリーとキャスをあんなにしてた人が、ゾハルを手に入れてー

モモ： はい、モモも同じ気持ちです。

ブリッジ

アレン： あ、あの主任ー今度の戦いが終わって無事に帰れたらー

シオン： なに、アレンくん？

アレン： つ、つつつ————

釣りに行きませんか？

シオン： 釣り？

アレン： ええ、魚釣り。僕、趣味なんです。

シオン： アレンくん、趣味なんてあったんだ。

休みの日も研究室につめてるから、仕事が趣味なんだと思ってた。

アレン： （それは、ほんとに仕事が趣味の人が、僕の目の前にいるからですよ）

————それで、ですね。僕が釣った魚を、主任が浜辺でカレーにするーってどうです？

シオン： （浜辺の魚って、カレーにあうのかなー？）

————うん、楽しそうね。じゃあ、今度行きましょう。

アレン： ほ、ほほほほ本当ですか！

シオン： ええ、Jr.くんやケイオスくんは器用だから、いっぱい釣ってくれそうだしー

モモちゃんはお料理手伝ってくれるわよね。

馬鹿兄貴の刀も、魚おろすのに使えるかしら？

アレン： あ、みんなでーですか？

シオン： ええ、楽しみね。

アレン： —————

ええ、そうですね。いやあ、楽しみだなあ。あは————

あははははは————

—————

（————はあ）

マッシュズ： よう、もういいのかい？

シオン： はい、ご心配おかけしました。

マッシュズ： まあ、ちっとはまともなメシが食えなくなると残念なんでな。

あんたが元気なツラしててくれると、助かるんだ。

シオン： ふふ、また腕によりをかけて、カレー作っちゃいますね。

マッシュズ： おう、楽しみにしてるぜ。

トニー： よう、シオン。あんたら、またたいへんだな——

シオン： ほんとですよ、最近マヒしてきちゃったけど、命がけのことばかり。

トニー： きっとそんな生活、次の戦いで終わりだぜ。

シオン： ええ——

トニー： 賭け、しないか？

シオン： 賭け——ですか？

トニー： 生きて帰れたら、スイートでワイングラス、今度こそ、どう？

シオン： それ——賭けになんないですよ。生きて帰れなかった場合の条件、つけられないもの。

トニー： しまったあ！ いままでは、このパターンで上手くいったのになあ————

シオン： ふふ、残念でした。

シオン：あの、ハマーさん――

ハマー：――っかしいっすねぇ。

シオン：ハマー――さん？

ハマー：何度、遡ってもあそこに行き着くなんて――

シオン：？

ハマー：うーん、これ以上は偽装かましてるように見えないんすけどねぇ――

シオン：（――聞こえてないみたいね）

カナン：――アニマの器の調子はいいようだ。思う存分、E.S. を使ってくれ。

シオン：ありがとうございます。あの――――

カナン：なんだ？

シオン：カナンさんって、ジギーさんとは古いおつきあなんですか？

カナン：いや、先日、第二ミルチアで知ったばかりだが――なぜだ？

シオン：いえ、なんだか――

時々、すごく懐かしそうな目で、ジギーさんを見ているような気がしたから――
勘違いですね、ごめんなさい。

カナン：いや――――

（俺が――隊長のことを懐かしそうに――――？

――――――隊長？ 隊長とは、なんのことだ――？）

――

？？？：シオン、E.S. にはもう慣れた？

シオン：ええ――――最初の頃は、乗るとすごく疲れるようなこともあったけど。

いまは大丈夫、なんとか使っていけると思う。

ケイオス：そっか――――

（大丈夫――――きっと、いまのシオンたちなら、アニマの器にとりこまれたりは――）

シオン：え、なに？

ケイオス：ううん、なんでもないよ。さあ、行こう。終わりにしなくちゃね。

シオン：ええ。

—

シオン： Jr. くん、さっき——お父さんから通信が来たそうね。

Jr.： ああ、聞いちゃったか。まあ隠すほどのことでもねえしな。

アルベドも俺もガイナンも、ずっとあのクソ親父の道具として使われた。

もう終わったと思ってたのにな——

シオン： Jr. くん————

Jr.： そんな顔するなって。子は親を乗り越えていくものって、決まってるんだぜ。

今度はこっちが利用してやる——そのくらいの気分でいくさ。

—

マッシュズ： よっしゃ、トニー！ ぶっ飛ばしてけ！

トニー： アイサー！ 目標・Ω システムどてっ腹！

へへ、そんなもんに当たるかよ！

ハマー： おっ、突入できそうな開口部を見つけたっすよ！

トニー： ようし、行っくぜえええっ！